

027

540

1

中華書局影印
古今圖書集成
卷之三



029
540
1



五二四

08411
104



雙林の妻事と餘生十日と
玄飞 河内称多喜門祐之成とは
かく是がよ そむく 一又金上小
はもまくんと東船の富みと
おわゆれ あはれ 二三とぞ寧ふよ
ひよひ芽室が義み黨あがめ
あがめ ほ磨乃海と迹をまく
さくはまく おもいと見とあんと

在水多つも醜國のちとを
さすきぢりあふ處都は人、故
怪しき取作傳怪のそりと地
主は是の達牛蓋面乃
志ぬるひくは古道山を隨を
坐れどもより小碑と様く碑
念す心小?



五十韻

一字使重者八部書之三
三四詩

善毛小詩毫近比山丈艸
春那生也因識乃下の肩歌多
多水
草鞋小詩とあく擇せり
舒子
反古張子昌原人は道うつま
六詩
管の董楊とは至る右首
琴河

貴賤自得一參詮乃私也へ里

艸也

休一少翁と支々來度し

吟里

重慶と南歸多は難を不度し

子風

往と外多ひて未以既経

農布

大と小と又は筆毛書多至

桐二

雀人の右と六ちへまくらふ

巴角

多參子等小祭を移掌すやうに

秀艸

六七一多儀の前。野田

東鼓

免一草詩古歌の通脚川 橋治

移詩の禮と笑ひ筆と笑

詩

秋室し廣以所み押あらあ

文

今夜と甲ゆき名自

み

移沙・拂之以物を引立移

子

云葉と拂之の如く若く

被

山櫻一里隔月生之

以

木乃莊子多達・給初子

大

子君の家中をかへ候。年
餘で朝八鳥帽を着て居
養ふはやくも高麗を罰せり
水を近ぢて長ひ及橋
國事に心付候。是れ白い松葉
の事より考へ知りとつて
憐みを志す。且多歎不爲
生多是作が狀不ぞ有る。文

次第嘗て此處爲事務残里
一時只題不仕度頃枝子
身を貰ひて少姑の傘乃水
滴。書了猶如身あらず河詩
立候。船以餘所と奉らむ。萬月
社政の國事行水。水事。社
神相は陸川子は少候。幅
金り人あらじ口と唇上
布

俗多六博小西諾多見之音上
角馬相逐者如日而以等

左邊以被毛經之差留之子
角毛以是毛三乃革之以鼓
木毛之毛能毛毛拔之毛之自
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
革毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
革毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
革毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

絃息子香は 横乃から子
歌歌の下毛毛毛毛毛毛毛毛
徒名の碑は 繩舟不似事毛毛
高毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

一座捻香

善水來之うの小毛毛墨道
大毛毛毛毛毛追し墨毛

金城
麥水
子風

墨書立於日之誰、志於川雷文艸
 乞其序也。不勝下墨直一、牴也
 墓書之言世齡の鳴鶯、時農布
 舍株もとと嘗て下墨直一、舒子
 九重母靈を幾多能墨直一、桐二
 苏の鳥を苦心也墨直一、六詩
 子嘉名少小也苦持テ墨直一、琴河
 二西綠玉矢立於的也墨直一、吟里

苏の鳥は石井潔もや墨直一、洛
 善直也筆也ニ何れくす小草、秀艸
 楊沙を拂ふ事墨を書くしり、楊沙
 ひきの草もかくある墨直一、巴角

遥拜

敦賀連中

蘇の鳥は石井潔もや墨直一、琴歌
 墓色も走る心やすむなよ、桂家
 ち美那也十原や梅のがくとよ
 其雪

臺直をりて猶かし山さか

曳尾

まきはり桂りらむや臺直

二望

取直く臺乃妹や臺なむ

雨不

柳の雪持のやす直

芥舟

落書き落水下に臺直

琴工

臺入直のやふ石や花の陰

大痴

おぎの白

ちよや梅を滿く臺直

鷺橋

羽州新莊

臺直をりて一葉も芽一叶
浪客 檀承

の香や春を吹度る臺直

洛陽

正統



一
あ
十
を
ち
う
り
な
る

四
樂
主
人
の
よ
う

東
山
子
め
く
ら
ひ



皆
生
き
れ
い
も
小
姐
の
身
が
三
四
才

不
幸
可
臺灣
詔
誓
の
雪
見
霜
入
船
株
之
絨
布
乃
重
う
て
六
倍

茅
葺
小
木
松
毛
屋
一
本
麥
水

雲
小
了
孫
也
名
室
主
小
香
薑
竹
吹
ち
き
召
賣
之
而
乃
重
多
四
角

立京

李夫人御事となり 摂自能登
笑怪て物ふをち望と放ふも、如僧
石山や何ぞく上の夕雲在、左
緋季の雪室と薙れ松葉うか 美濃
春絶りとくよにまゐはくわく
人を松ふゆり急ぐ櫻か耶 伊勢
梅う春ふ事とほきむる りの歌、左
葉

文通

はなう事とおはゆる
ものとゑう移ふ

加賀
金城連中

雪うるそひとすら多うる葉ふ 秋坡
かくは宣和へ詠しあはせ唐 白華
達うるそりと海みだり壯く桂 蝶司
本う思ふはすらは詠初櫻 君
梅う風ふ自然ふとむすめうり 禹谷
はなう事とおはゆる 休座哉 鰈釣

至竹質一聲引之大呼如某
淳富少傳之也昔竹牛床儿
松之至竹枝毛取之以桂
胡山東島二喬

全小松連中
雲外山を追ふ ものの花 暮ら
松ハすこじまくゆや梅林草 松井
不均處を移し草の雪 金東

卷之三

全
小松連中

詩と細君の達和善行の詮する所
者ニ
石燈をうへて後へ立つる様か有
在り
静さす公以輕心持ふ
外國
えりゆくあまやう聲八重音
会全
候雪中首とすぐに手が冷
竹免
掌のぬふと尻目みもつまゝ亂
湖舟
廢へる搞せ水素也あ葉雲
再可
著や書写著らし前
何伸

別れの意へ手を取る 義可郎
 嵐山を登りて石上をかづみむ
 杜妙
 梅の梢に雪と枝取る
 一刹
 山吹十葉を落すあとも時
 ぬ流
 そぞろちや富士を望むる
 梅枝
 花の有物あ萬葉被岸ノ風
 破石
 吹きゆふ波小舟行り 李の雪
 義合
 見ゆタ無事家裏をひき三井の鐘
 可易

追加

あまくはるの余於初日か
加賀

むすめの姫君あ春水に夕市在
當代物

大敵の卑卑なるの爲め
大敵の東方をもつて莫て之
一言あつても其の碑や
詔書の跡がつとて
あるは満殊也 無ふ今

まく御席の極きるのみのを
御坐居にて御ゆかしき聲
中のわざを加へし所小
説文の事と並心是の左
袖の事とすれども東夷の

一九二九年正月廿七日
以文部省官印存于書局
吉澤

主書

四
手稿



甲子年

申二月六日
江戸

尾高清宣寫
釋藏持主

上

加賀藩
御文庫
藏書

大正八年
八月